

高橋伸夫先生を悼む

「君のような学生を待っていたんだ。」満面の笑みをたたえ、私の両手を温かく包んでくださった高橋伸夫先生のお言葉を、私は生涯忘れることはないだろう。1991（平成4）年のある春の日のこと、これが高橋先生とのファーストコンタクトであった。私が今、曲がりなりにも地理学の世界で生計を立てているのは、この時の高橋先生との出会いにあったといっても過言ではない。もしこのとき高橋先生に励まされなかったら、私は筑波大学で地理学を学んではいなかっただろう。

それから22年の歳月を経た今年（2013年）の夏、京都国際会館で開催されていた国際地理学会議の席で、ソルボンヌ大学名誉教授のピット先生とお会いした。「ノブオは元気になっているか。」ピット先生の最初のお言葉だった。「最近お目にかかっているのですが、お元気にされていますと思います。」私はそう答えつつも、高橋先生にしばらくお会いしていないことに改めて気づかされた。国際会議の折りにお目にかかった日本人の先生方とも、「高橋先生はお元気でしょうか。」という会話が何度か交わされたのも、今思えば暗示であったのか。高橋先生がその時安らかに永眠されていることを、われわれは誰ひとり知らなかった。高橋先生のご遺志とご家族様のご配慮により、われわれは先生のご逝去という悲しみからしばらくの間猶予されていた。8月の末に先生の訃報に接し、田林先生、山下清海先生、村山先生とともに先生のご自宅にお伺いしたとき、先生は遺影というお姿でわれわれに微笑みかけてくださった。

地理空間学会会員であり、筑波大学名誉教授であられた高橋先生は、2013年7月14日に73年10か月のご生涯を静かに閉じられた。謹んでご冥福をお祈り申し上げるとともに、長年にわたりご指導を賜ったことに対して深甚なる感謝の意を表したい。

高橋先生は、1939（昭和14）年9月29日、東京都台東区にお生まれになられた。東京教育大学附属高校を卒業された後、1960年4月に東京教育大学理学部地理学専攻に入学された。大学1年次における担任の一人が青野壽郎先生であり、青野先生のご薫陶を受けて人文地理学講座で卒業論文を執筆された。大学卒業後、母校にて1年間教諭としてお勤めになられた後、1965年4月に東京教育大学大学院理学研究科地理学専攻の修士課程に入学された。理学修士号を取得されると、続いて同大学院の博士課程に進学され、1969年4月に東京教育大学理学部地理学教室の助手に着任された。

東京・下町に生まれ育った高橋先生は、青野先生のご教示もあって都市地理学を生涯にわたるご専門とされた。高度経済成長期のさなかに研究生生活を開始された先生は、都市化研究、なかでも工業化に伴う土地利用変化と都市化とのかかわりをテーマとする実証的な研究に取り組みされた。「三島・沼津地区における工業化に伴う都市化の展開」（地理学評論41巻、1968年）をはじめ、「わが国における農地転用からみた都市化の段階」（地学雑誌78巻、1969年）、「日本の工業化段階と工業都市形成（上・下）」（共著、経済地理学年報16巻、1970年）といった一連の研究成果を主要学会誌に次々と発表された。

フランス政府奨学金を得て、1970年10月から2年間、パリ第一大学地理学研究所博士課程に留学され、「日本における工業化に伴う都市化の進展」（邦題）により同大学院で博士号を取得された。このフランス留学の体験は、その後の高橋先生の学問において非常に重要な意義をもつこととなった。フランスを代表する地理学者であったパンシュメル、ダルマツ、クラヴァル先生（写真1）らやピット先生との交流は、

その後の筑波大学人文地理学研究室におけるフランス地域研究の礎となった。

1974年4月、開学間もない筑波大学地球科学系に講師として着任された。翌1975年には清水地域における都市化研究により、東京教育大学より理学博士号を授与された。1979年3月に筑波大学地球科学系助教授、さらに1990年2月に教授に昇任された。私が初めて高橋先生の研究室を訪問したのは、この当時のことであった。

高橋先生はご生涯のなかで、約40冊の著書と150編を超える論文を発表された。お忙しい日々のなか、かくも精力的に研究を進められてきたことは驚嘆に値する。その豊かな研究業績の全容を紹介することは私の手に余ることであるが、先生のご研究は大まかに4つに分類することができよう。

第一に、日本における都市化研究および大都市圏の空間構造にかかわる研究である。1988年、高橋先生は日本地理学会において「都市地理学研究グループ」を代表者として立ち上げると、科研費の助成も得て、国内の主要な都市地理学者と連携しながら日本の三大都市圏の構造変容にかかわる研究を進められた。とくに都市の内部構造および都市における住民の生活空間の特性の解明にあたられ、これらの成果は、『日本の生活空間』（編著、古今書院、1990年）や『日本の三大都市圏』（共編著、古今書院、1994年）として上梓された。

第二に、金融の地理学にかかわる研究である。高橋先生は、フィールドワークに基づく景観観察の大切さを絶えず強調されていたが、都市の中心性をはかる機能として金融機関に着目し、目に見えない資本の流れを丹念に追うことにより、関東地方における都市の機能的・景観的特性を明らかにされた。これらの研究成果は、『金融の地域構造』（大明堂、1983年）にまとめられた。

第三に、海外地域研究である。ブラジル、アルゼンチンにおける都市化研究をはじめ、留学時代に培われた研究者ネットワークを活かしつつ、フランス地域研究に大きな足跡を残された。1990年代には、科研費の国際学術研究の研究代表者として、筑波大学人文地理学教室出身者を中心とする研究グループを組織され、パリ大都市圏およびリール、リヨン、トゥールーズ各都市圏の都市構造研究を推進された。一連の海外地域研究は、『フランスの都市』（二宮書店、1981年）、『ラテンアメリカの巨大都市』（共著、二宮書店、1994年）、『パリ大都市圏』（共著、東洋書林、1998年）、『フランスの地方中心都市』（共編著、古今書院、2003年）などとして出版された。フランス地理学会からは、高橋先生の功績をたたえて、銀メダルが授与されている。

第四に、地理教育、とくに大学における地理教育にかかわる貢献を指摘したい。高橋先生は学者として、その成果を専門家に問うのみならず、大学教育に還元し、地理学のすそ野を広げることに大きな努力を払われてきた。都市地理学、文化地理学の入門書や地理学にかかわるテキスト類の編纂、地理学講座本の編集など、積極的に手掛けてこられた。20世紀末から21世紀初頭にかけて、地理学を学ぶ大学生は、必ずや



写真1 ポール・クラヴァル先生（ソルボンヌ大学名誉教授）をお迎えして
(1999年2月；筑波大学人文地理学談話会)

高橋伸夫の名前を目にし、その書物を手にとったことがあるに違いない。ご退職後、先生は半ば自嘲的に、「教科書の高橋なんて揶揄されているのさ」と幾度となく口にされていたが、地理学の門前に立つものにとって先生のお書きになられた入門書がどれだけ道標になったか、先生に感謝の言葉を伝えていれば、喜んでくださったに違いない。

高橋先生が日本の地理学界に残された遺産は、研究業績にとどまらない。筑波大学の教授として22名の学生・研究者に博士号を授与された。筆者もその一人であるが、ご専門の都市・経済地理学のみならず、農業・農村地理学や文化地理学の学生に対しても、ご自身で絶えず勉強をされながら、時にユーモアを交えつつも学生には常に厳しく指導をされてきた。教授に昇進されて以降、学内にあっては大学院研究科長や学系長といった要職を務められたほか、学会では各種評議員や理事、日仏地理学会会長として活躍された。あまりに多忙な日々が先生のお命を削っていったのかと思うと、自分にもその一因があるように思われ、慚愧にたえない。

私は高橋先生のもと、大学院生として5年、職場では技官・講師として6年の間、勉強させていただいた。「ここは義務教育ではない、やる気がないものは辞めてしまえ!」、ゼミで発せられた先生の怒号は今でも耳に残っている。投稿論文を真っ赤に添削され、「日本語も満足に書けないのか」と怒られたこと、一転して酒席では、頬をほんのり赤く染めながら、明るく他愛ない冗談を飛ばされていたこと、いずれも、つい昨日のこのように思い出される。十分な恩返し(御礼参り?)をすることができなかったことが、本当に残念でならない。



写真3 筑波大学最終講義にて
(2003年2月)



写真2 大学院・人文地理学野外実験(茨城県水戸市)にて
(2001年5月)

高橋先生はご退職後、体調がすぐれない中でも、最後の力を振り絞り、研究者として、生き続けてこられた。私が公務にかまけて論文を書かないでいると、「教育に逃げ込むな」と注意された。大学人として教育者であることは当然であるが、これを隠れ蓑として研究をサボることは許されない、という先生の意味であった。お亡くなりになられる1か月前に『都市空間の見方 考え方』(共編著、古今書院、2013年)を出版された。筑波大学で指導された野外実験(写真2)による調査報告をまとめられた成果であった。功成り名遂げられた学者が死を賭してまで、本を出すことの重みは、われわれ後進のものにとってずしりと響いてくる。

私が先生に出会った1990年代以降、先生は重たい十字架を背負い続けてこられた様に思われる。最終講義のときにお見せいただいた笑顔（写真3）もつかの間の安らぎであったのだろうか。大塚の地理学の伝統を発展・継承するために腐心されてきた先生のご遺志を、今後の研究・教育活動や地理空間学会の隆盛という形でお引継ぎしていくことで、先生から頂戴した多大なるご厚誼へのせめてもの恩返しとしたい。先生、どうぞ安らかにお休みください。そして先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（松井圭介）